



鞆等が代表する無数の店舗は形上にこそ機能的な変化はある、何れも独特の慣習を守り続けて「上方」の誇りは今もあかくと輝いて消える事がない。

## (二) 上方商人神戸「カネタツ」

よかれ悪しかれ、因襲と封建制度に固められて来た上方商家の風習は、その時その時の生活の智恵でもあった。今でこそ民主主義に看板が塗り替えられて一昔前とは隔世の感があるが、明治者の私等にはまだ（記憶も新しく又容易に当時の殻から脱け出したとは云い切れない。早い話が、鈴木商店につめた私等は大主人の事を今でも「お家さん」と呼んで居る、社長でもなければ代表社員でもなくそんな呼び名とは凡そ縁が遠い、私等には終生「お家さん」と云う親しみをこめた呼び名を切り離す事は出来ないであろう。関西ではつい先年迄町家の主筋を「だんさんばん」等の敬称で呼ばれて来た。私は終生「お家さん」と云う親しみをこめた呼び名を切り離す事は出来ないであろう。

店売りの小商人や仕舞家は知らず、私が見た帳場は一寸奇異な感じがしたがよく考へると大切な記念としてそのまま保存されて居るかの様であった。その帳場の後方に明り取りの中庭があつてそのも一つ奥に母家があつた、残念乍ら母家へは行く用事がなかつたので其所の模様はうかゞい知る事は出来なかつた。案するに帳場の二階が店員の寝所に當てられて居たのであるう、それ以上の事は遂に判らずじまいである。私等が本店の宿直に当つた初期の頃、大金庫を開めた後、鍵を小型のトランクに納めて之を保管してもらつたが間違つて行くと、年配の重厚な貴婦の人が受け取りに出て来られた。

入店直後の事とてその人が何んにお名前も知らなかつたが間もなくこの習慣が變つて以後は中山手の西川支配人の本宅へ届ける事になった。私は遂に本家のその方をばんやりした記憶の外へ流し

夜、栄町の本家で見た印象は和服姿に角帯を締めて何如にも実直そは次のように話して居られる。「本家の留守を預つて居られたのは酒井丑松さんで、お家さんや御家族

には名前の下に「吉」をつけて「何吉つとん」と呼ばれ、それから手代番頭と呼ばれる様になる迄に、その時その時の生活の智恵は「何兵衛はん」と呼ばれ、大きな仕事と責任を持たされ無事年期を勤め終えると「のれん分け」と云う別家を許される。その長い年月朝早くから夜おそく迄使され、休日と云えれば正月三ヶ日と盆の数入りだけ、氏神さんの夏祭りには午後から暇が出る位がせい／＼でも「お家さん」と呼んで居る、社長でもな

くそんな呼び名とは凡そ縁が遠い、私等には終生「お家さん」と云う親しみをこめた呼び名を切り離す事は出来ないであろう。関西では

つい先年迄町家の主筋を「だんさんばん」等の敬称で呼ばれて来た。他国から丁稚奉公に来て身を立てた人もある。

その人達が二代三代と世代を重ねるに従い何時しかゆるぎない上

数人以上の奉公人を抱えた中級の商家から大口取引専門の「問屋」と称する大店に到る迄從業員には古くからきびしい階級制度があつた。初めて雇われた初奉公の丁稚

が皆大手の方へ引越された後、何う云う訳か、御仮壇だけが栄町の本家に残つて居た、そのお守りをまにしてあつたのではなかろうか、私が見た帳場は一寸奇異な感じがしたがよく考へると大切な記念としてそのまま保存されて居るかの様であつた。その帳場の後方に明り取りの中庭があつてそのも一つ奥に母家があつた、残念乍ら母家へは行く用事がなかつたので其所の模様はうかゞい知る事は出来なかつた。案するに帳場の二階が店員の寝所に當てられて居たのであるう、それ以上の事は遂に判らずじまいである。私等が本店の宿直に当つた初期の頃、大金庫を開めた後、鍵を小型のトランクに納めて之を保管してもらつたが間違つて行くと、年配の重厚な貴婦の人が受け取りに出て来られた。

本店での酒井丑松さんは麦酒部の主任で、桜ビルの製造から販売に到る迄の一切を切り廻されて居た、鼻下に立派な髭を生やし頭髪を綺麗に分けて見るからに堂たるタイプの紳士であつたが、

夜、栄町の本家で見た印象は和服姿に角帯を締めて何如にも実直そは次のように話して居られる。「本

家の留守を預つて居られたのは酒井丑松さんで、お家さんや御家族の間に桑田卯之助さんや松本三平

金子さんの「直吉つとん」も柳田さんの「富士やん」もきびしいと称して居た。昔は店と住居が一上方商法のしつけの中にそれ／＼しての研鑽と根性を体得された何年何十年かの年期を勤めなければならぬ。丁稚から手代に昇格されると名前に「七」が付き「何七つとん」と呼ばれ今迄の厚司前垂れ姿から、たもとの着物になりやがて羽織を許される、番頭はんは「何兵衛はん」と呼ばれ、大きな仕事と責任を持たされ無事年期を勤め終えると「のれん分け」と云う別家を許される。その長い年月朝早くから夜おそく迄使され、休日と云えれば正月三ヶ日と盆の数入りだけ、氏神さんの夏祭りには午後から暇が出る位がせい／＼でも「お家さん」と呼んで居る、社長でもな

くそんな呼び名とは凡そ縁が遠い、私等には終生「お家さん」と云う親しみをこめた呼び名を切り離す事は出来ない。

この頃、世上は漸く四海均等、

四民平等の氣運が隆まり封建的な階級制度が追々下火となつて実力

を勤め終えると「のれん分け」と云う別家を許される。その長い年月朝早くから夜おそく迄使され、休日と云えれば正月三ヶ日と盆の数入りだけ、氏神さんの夏祭りには午後から暇が出る位がせい／＼でも「お家さん」と呼んで居る、社長でもな

くそんな呼び名とは凡そ縁が遠い、私等には終生「お家さん」と云う親しみをこめた呼び名を切り離す事は出来ない。

才の時の開業迄には勿論迂余曲折を経ての事ではあるが、大阪の辰巳屋松原恒七に奉公して上方商人としての研鑽と根性を体得された何年何十年かの年期を勤めなければならぬ。丁稚から手代に昇格されると名前に「七」が付き「何七つとん」と呼ばれ今迄の厚司前垂れ姿から、たもとの着物になりやがて羽織を許される、番頭はんは「何兵衛はん」と呼ばれ、大きな仕事と責任を持たされ無事年期を勤め終えると「のれん分け」と云う別家を許される。その長い年月朝早くから夜おそく迄使され、休日と云えれば正月三ヶ日と盆の数入りだけ、氏神さんの夏祭りには午後から暇が出る位がせい／＼でも「お家さん」と呼んで居る、社長でもな

くそんな呼び名とは凡そ縁が遠い、私等には終生「お家さん」と云う親しみをこめた呼び名を切り離す事は出来ない。

この頃、世上は漸く四海均等、

四民平等の氣運が隆まり封建的な階級制度が追々下火となつて実力を勤め終えると「のれん分け」と云う別家を許される。その長い年月朝早くから夜おそく迄使され、休日と云えれば正月三ヶ日と盆の数入りだけ、氏神さんの夏祭りには午後から暇が出る位がせい／＼でも「お家さん」と呼んで居る、社長でもな

くそんな呼び名とは凡そ縁が遠い、私等には終生「お家さん」と云う親しみをこめた呼び名を切り離す

元引受書が綴られて居る、その他資料が一ぱいあって、遠く思いを馳せて居ると興趣がつきる処をしらぬが残念乍ら茲はとてもの貴重な文献的古文書を会員諸氏に御目に入れ度いと考えて居るが今余裕がない。私等は何等かの形でこの適当な具体案を持ち合せない、若しこの点に関し御気付きや思い付しがあれば端書のはしに一行でも結構、何等かの御意見やヒントを御教示賜り度いと広くお願ひするものである。

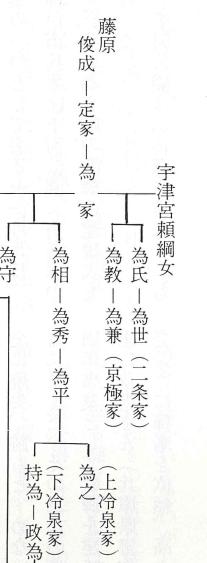
何わともあれ「お家様」は我々にはばかり知れぬ程の大きなお方であらせられた。下司の感ぐりだが「女ながらも胆つ玉の大きい、もうう様な事が少なかつた為、雲の上の富士山を仰ぐ様な気持ちで遠くからお見上げするより仕方がなかつた、当時既に千人を越す大世帯だったからである。それで居て私等の幼い目にも、切り髪姿の大手の本宅へ入店の御挨拶に上った時、賞与をもらう時うや／＼し

く御札をして見上げたお顔、正月の年賀にはるか下手に列座してお声を聞いた時の身の引き締まる様な思い、手桶に花を一ぱい盛つて本店の各部へお配り下さった姿。あの小さなお体の何所にあれだけの大きな抱擁力を藏して居られたのであろうか、私は今でも神秘的な迄に神々しいお姿をはつきり思ひ出せる事が出来る。

あつた。ともあれ、上方商人の一つの典型として後世に名を残された「お家様」の精神はその衣鉢と共に永く語り伝えられる事である。

さて、今年は辰年、辰巳会の年である。ひる寝の兎は遂に不況の宿眠りから醒める事なく數々の宿題を残して年が変ってしまった。今年は昇り龍の縁起にあやかって、物価以外の色々な事を向上してもらいたい度いものである。とりわけ辰巳会の発展と会員諸氏の健康と福祉を一段と向上く様、そして余生に栄光あれと念じつゝ終稿する。

阪神辰巳会	新年初顔合
一、日時	昭和五十一 午前十一時
二、会場	大阪中津
三、演奏	箏曲 宮城道 さらし風手打
四、歓談	若葉会 南山
五、会費	三千円
◎御誘い合わせ	多數御 うお勧め致します。



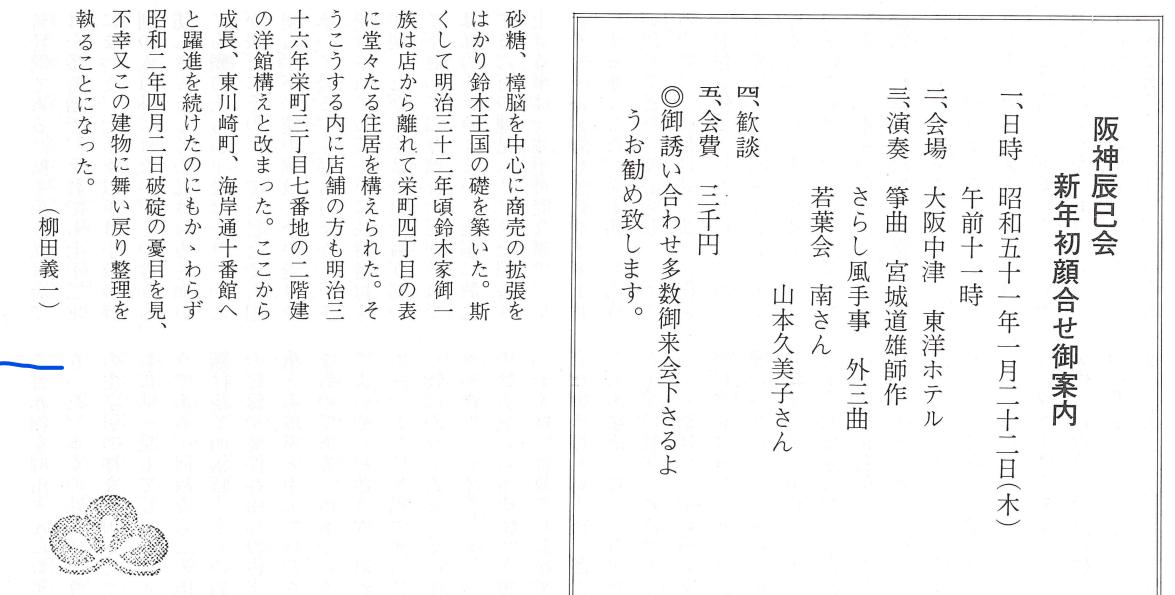
史談

藤原為家卿と十六夜日記

兵庫県三木市細川町と、その名の残る細川荘は、この「十六夜日記」一巻によつて、今日まで人々に記憶されることになる。

によってて地頭職（地頭としての職務と、それに附隨した権利）を寄進される。当時の莊園には、幕府から御家人が地頭として派遣されていたが、この幕府勢力を背景にした地頭の非法には、どこの莊園領主も泣かされていた。細川莊では、檢非遺使後藤基清の乱暴に困ったことがあり、越部莊も地頭の非法があつたというから、領家職（莊園から収納することのできる経済的権利）と地頭職を合わせもつた定家は、実朝のおかげでそういう不愉快な紛争から逃れられ、

すでに五十の坂を過し、勅撰集の撰者になるほどで歌の家の跡継ぎとして押しも押されもない。しかも、為相たちの生れる数年前に、為家は所領の处分を決定し、細川莊の領家職は孫の女子に一期限り与え、あとは為氏の子孫に返附させること、同地頭職は為氏に与えることにして、すでに譲状を書いていた。為家の子源承の書いた「和歌口伝」に依ると阿仏尼は、



## 日記成立の事情

しかも経済的にも地頭分の収入がふえたわけだ。定家の死後、莊園は子の為家のものになるが為家没後に孫の間でこの所領をめぐつて長い紛争が起ることは、定家の予想外だったに違はない。

米会下さるよ

元引受書が綴られて居る、其の他  
にも当時の世相に関連する幾多の  
く御札をして見上げたお顔、正月  
の年賀にはるか下手に列座してお  
まつば一々、ひつぱり、まつぱり、

あつた。ともあれ、上方商人の二  
つの典型として後世に名を残され

阪神辰巳会

新年初顔合せ御案内

一、日時 昭和五十一年一月二十一日(木)

午前十一時

二、会場 大阪中津 東洋ホテル

三演奏 箏曲 宮城道雄師作

若葉会 南さん

山本久美子さん

四、歎談

五、会費 三千円

○御説い合わせ多数御来会下さるよ  
うな勢の如く。